報告2

サバ州在住のフィリピン人キリスト教徒

細田 尚美
長崎大学

私の報告では、サバ州、特に州都のコタキナバル市に暮らすフィリピン人キリスト教徒の社会統合について、現地で行ったライフヒストリーの聞き取りの内容を基にお話しします。

サバ州とフィリピン人について

フィリピン人はマレーシアに在住する主要な外国人の１つとして知られています。同時に、フィリピン側からみても、マレーシアは在外フィリピン人が目立って多い国の１つです。フィリピン政府の統計データによると、2013年現在のマレーシア在住フィリピン人は79万3,580人でした。滞在資格別にみると、結婚などで定住している永住者が２万6,007人（全体の3.2%）、正規の就労者など短期滞在者が31万9,123人（同40.2%）、非正規滞在者が448,450人（同56.5%）でした［CFO 2017］。非正規滞在者がマレーシア在住フィリピン人の過半数を占めているのです。非正規滞在者45万人という数字は、世界的にみてもマレーシアが最多の非正規滞在のフィリピン人を抱えていることを示しています。その非正規滞在者の多くはサバ州に住んでいるといわれます［Battistella and Asis 2003］。

次に、移動先としてのサバ州の特徴として３点挙げます。第１に、サバ州では歴史的経緯の違いから半島部とは異なる民族構成がみられます。第２に、サバ州はかつてから隣接するインドネシアやフィリピンなどと民族的に、さらに交易の面からもつながっている海域圏の一部であり、なおかつ、両国との間の国境管理が徹底していません。第３に、フィリピンとの間には領土問題が存在するため、サバ州には、在住フィリピン人の多さにもかかわらずフィリピン領事館がありません。

本報告の目的

以上、概観を述べましたが、本報告では次の２点に触れていきたいと思います。１点目として、事例から明らかになったサバ州在住のフィリピン人キリスト教徒の現状をお伝えします。サバ州在住のフィリピン人、あるいはフィリピンにルーツを持つとされる人たちは、民族、宗教、階層、そして滞在身分といった様々な観点からいって、実に多様であり、こうしたサブグループは相互に重なり合う部分を持ちながらも、それぞれが独自の境遇・立場におかれているといわれます［Kassim 2009］。そのなかで、サバ州在住のキリスト教徒の社会統合については、清水展さんが、1990年代末から2000年代半ばにかけて同州でライフヒストリーを聞き取った調査の結果をまとめた貴重な論文［清水 2009］があるほかは、非正規滞在者［e.g., Kassim 2009; Kassim and Gin 2011］や無国籍の子どもたち［e.g., Lumayag 2016; Allerton 2017］の問題を指摘する研究のなかで部分的に触れられる程度にとどまっており、より多くの事例研究が求められる状況です。２点目として、インタビューできた長期滞在者の事例を紹介し、かれらが長期滞在に至った経路を分析し、予備的考察を行います。

調査の概要

調査は2016年から2019年の間にサバ州コタキナバル市を中心に延べ３週間ほど行いました。この間、参与観察にくわえ、聖心カトリック教会という同市の中心的教会で組織されているフィリピノ・コミュニティのメンバー７人とメンバー以外の方１人に話を聞かせてもらいました。くわえて、店内や路上で、フィリピン人の方々やフィリピンにルーツを持つマレーシア人の方々からも話を聞いたほか、サバ州の政府関

係者や大学関係者にもインタビューをさせていただきました。使用していた言語はタガログ語と英語です。なお、今回、サバ州で聞き取り調査をしてみて、非正規滞在者の数や割合が大変多い地域という事情のためか、サバ州では出会ったフィリピンの方々へのインタビューは、これまで私が調査をしたことのある湾岸アラブ諸国やアジアのシンガポール、香港、日本などでの経験と比べて、難しいと感じました。そのため、ライフヒストリーの聞き取りは、正規に滞在しているフィリピン人の方々に限られています。

コタキナバル・フィリピノ・コミュニティ

コタキナバル市には複数のフィリピン人キリスト教徒の団体があり、コタキナバル・フィリピノ・コミュニティ（以下、FC）はその中の１つです。FCメンバーによると、FCは聖心カトリック教会で1986年に発足しました。中国系マレーシア人と結婚したあるフィリピン人女性が、当時増えてきたフィリピンの人たちをサポートするコミュニティの必要性を感じ、組織しました。2019年現在、100人以上の会員がいます。メンバーの多くは、①マレーシア人の配偶者を持つ人と、②フィリピン人海外就労者（overseas Filipino worker = OFW）です。非正規滞在の人たちもいますが、その割合は中心メンバーも把握していないとのことでした。会費はOFWの場合、仕送りが大変だからという理由で年５リンギ、仕送りをしなくてよい家族ビザの人で、なおかつ定期的に活動に参加する人は25リンギとなっています。

メンバーの日常生活

メンバーたちの活動の中心は日曜日です。午前中の英語ミサに出席したあと、教会の敷地内にあるセミナー室でフェローシップという自分たちだけの祈りと分かち合いの時間を持ちます。参加者同士で持ち寄った手作りフィリピン料理を食べた後、一部の人は仲の良いメンバーとモールへ移動して映画を観たり、ファーストフード店で食事をしたり、SNS用の写真を取り合ったりして夕方まで過ごします。ほかに、誕生日パーティなど催し物や小旅行も企画しています。メンバーの１人によると、このようにフィリピン人の仲間と楽しく付き合うのは、マレーシア滞在中に孤独感に悩まないように、そして、何か問題が起きた時に助けてくれる人を確保するためでもあると語っていました。

助け合うのはFCのメンバー内だけではありません。一例を挙げると、コタキナバル市では違法滞在者を摘発するための強制捜査が頻発しています。強制捜査で捕まったフィリピン人がコミュニティのメンバーでなくても、特別な事情がある人は永住者となっている人が身元引受人となり強制送還にされないよう助けることがあるそうです。

他のフィリピン人について（メンバーからの聞き取り）

非正規滞在のフィリピン人キリスト教徒についてメンバーに尋ねると、違法リクルーターにだまされてくるフィリピン人は現在も多く、人里離れた過酷な職場（プランテーションなど）から逃げ出せずに死亡するケースは後を絶たないとのことでした。非正規滞在のフィリピン人は強制送還を恐れ、フィリピン人のたまり場として周囲から目立つような場を作ることは避けるそうです。可視化しないように暮らす生活スタイルを、あるフィリピン人女性は「私たちは別々（タガログ語で*kanya-kanya*）に生きる」と表現していました。ほかに、本当の名前や背景を人に言うことは避けることが一般的だと話していました。サバ州に領事館がないため、クアラルンプールからフィリピン領事館職員がコタキナバルを年に１回程度訪れますが、非正規滞在者の多くは様々な事情から出向かない傾向があるとの指摘も聞きました。

他方、フィリピン人のムスリムの方々については、あまり話題になることがありませんでした。私のほうから、キリスト教徒もムスリムも含むフィリピン出身者の包括的なコミュニティ、あるいはフィリピン系ムスリムのコミュニティもあるのかとメンバーの１人に尋ねたところ、包括的なコミュニティの存在は聞いたことがなく、また、かれらはかれらのコミュニティを作っているかもしれないが、そもそも交流しないの

でわからないと答えました。例外的に、フィリピン人のムスリムについて触れられるのは、永住権との関連です。一般にサバ州でムスリムと結婚すると永住権が取れやすいので、ムスリムと結婚するカトリック教徒の男女はいるという語りをたびたび聞きました。それと対照的に、ムスリムではないマレーシア人と結婚した場合、子どもはマレーシア国籍となるが、自分たちは何年滞在しても永住者にしてくれないと話していました。

ライフヒストリーを聞いた人たち

続いて、聞き取ったライフヒストリーの内容から、フィリピン人キリスト教徒のマレーシアへの包摂過程について考えたいと思います。

ライフヒストリーを聞いた８人は、性別でいうと女性７人、男性１人です。女性の方が圧倒的に多いですが、FC参加者全体をみても大多数は女性でして、日曜日のフェローシップ参加者の割合でいえば、男性は10人中1人かそれ以下です。８人の年齢層は40代～80代で、最も多いのは50代（４人）でした。フィリピン各地（ルソン地方３人、ビサヤ地方２人、ミンダナオ地方３人）から来ており、現在の職業は家事労働者２人、調理師１人、配ぜん人１人、美容師アシスタント１人、ボランティア教師１人、歌手１人、無職１人と様々です。滞在資格でみると、家族（配偶者や成人した子どもの被扶養者）ビザの方が４人、就労ビザ（OFW）の方が４人です。

フィリピン人キリスト教徒の
マレーシアへの包摂過程（事例）

８人はいずれもサバ州在住歴が10年～60年程度ですから、辿ってこられた人生はとても多様です。しかし、ここでは時代的に３つの時期に整理して事例を紹介することとします。第１期は、およそ1950年代～1970年代半ばで、専門職従事者がフィリピン人キリスト教徒である移民の中心を占めた時代です。ほかに、サバ州に何らかの伝手（家族・親族などを伝ってのチェーンマイグレーション）があったために来たというケースも存在します。第２期は、およそ1970年代半ば～1990年代で、違法リクルーターや密航業者が介在していたケースが多かった時代です。第１期と同様、ほかに家族など個人的な伝手でサバに来た人もいました。第３期は2000年代～現在で、正規の海外就労者（OFW）としてサバに働きにくる人が増えてきた時代です。一方で、違法リクルーターによってサバ州に連れてこられた人もいましたし、チェーンマイグレーションも続いています。

◉事例１――マリー（88歳）

第１期の例としてマリーさんを紹介します。FCメンバーのなかの最高齢で、ほかのメンバーから「お母さん」と呼ばれ、慕われている様子でした。なお、以下、事例で紹介する３名の名前はすべて仮名、年齢は2019年現在のものです。

マリーさんはルソン島中部ブラカン州出身で、マニラの私立大学在学中にフィリピン南部のスールー州出身の男性と知り合い、結婚しました。その後、夫が1956年にサバ州東海岸のタワウ町で技師として働くことになりました。マリーさんは当時、自分の親とうまくいっていなかったため、喜んで夫に同行したそうです。６人の子どもを産み、そのうちスールー州で生まれた１人を除き、全員マレーシア国籍を取得しました。マレーシア国籍を望んだ夫もマレーシア国籍を取得しました。子どものうち1人はニュージーランド人と結婚し、現在オーストラリアで暮らしているので、時々オーストラリアに遊びにいくそうです。

彼女によると、「1950年代～1960年代にはたくさんのフィリピン人がサバに呼ばれてきた。待遇もよかった。フィリピン人に対して（サバの人たちは）尊敬の念を持っていた」と語っていました。その後、多様なフィリピン人がサバに来るようになって、「フィリピン人は怪しい」というイメージが出現したと考えています。

マリーさんは、自分はフィリピン人だからフィリピンの国籍を変えることはないと言っていましたが、子どもたちがマレーシア、フィリピン、オーストラリアと世界各地に住んでいるため「終の棲家はどこでもよい」と言っていました。夫に先立たれた今、子の家族ビザでコタキナバル市に滞在しています。

第１期にサバ州に移住した高学歴の専門職従事者

の事例については、先の清水氏の論文［2009］に詳しく書かれています。このグループはサバのイギリス植民地時代からマレーシア加入に至る時期に移住した人たちです。かれらは技術者や教育者として「新天地」サバの発展に寄与したと自負し、当時、フィリピン人が永住権や国籍を取ることは比較的容易だったとされます。実際、FCのメンバーらとコタキナバル市の街の中を歩いていても、「この建物はフィリピン人が建てた」、「これらの（サバの）土産物は、フィリピン人が持ってきた。名前だけSabahと書いて売っている。同じものがフィリピンではPhilippinesとかManilaと書かれて売られているでしょう」などと話すのを聞きました。

◉事例２――スージー（56歳）

第２期の事例として、スージーさんの例を紹介します。

ミンダナオ島西ミサミス州出身で、幼いころ両親と死別し、叔母に育てられました。1984年、ミンダナオの大学に在学中、かつて叔母の家に居候していた女性がサバから戻り、羽振りがよくなった様子のその人に誘われて、自分もサバへ行くことを決意しました。女性の夫の手引きで、他３人と一緒に船に乗り、フィリピン側の国境のタウィタウィ島などを通りサバ州東海岸のラハ・ダトゥ町にたどり着きました。そこで監禁され、自分たちは「売られていた」ことに気づいたそうです。当時サバ州に行くにはパスポートが要らないと聞かされていたので、パスポートを用意せずに出発したことについては不思議に思っていませんでした。ただ、渡航費などの必要経費として請求された、当時は大金だった1,500ペソを女性に支払ったにもかかわらず、飛行機ではなく船に乗せられたとき何かおかしいと思い始めたけれど、その時点で渡航を断念することは既に難しく、言われるがままに船に乗った、と語っていました。

翌年から山間地にあるカカオ農園で働かされ、地べたに寝ながら、毎日配られるマラリアの薬も飲み続け生きる日々を過ごしていました。一緒の船で来た若い医者は体調を崩し、身につけていた金の指輪を売って逃げ出しました。スージーさんはカネに換えられるものは何もなく、農園から逃げるために15歳の「マレー」の少年と結婚し、カトリックからイスラームに改宗し町へ出ることができました。男児を出産した後に離婚し、身を隠し、次にタワウでアブラヤシ・プランテーションの農園管理者のカダザンの男性（キリスト教徒）と再婚し、さらに３人の子を産みました。子どもたちは全員マレーシア国籍です。その後、夫の素行に耐えられずに2013年に離婚し、その後は、コタキナバル市の長男の家族ビザで滞在し、家事労働者として働いています。

スージーさんのように、1980年代ごろにミンダナオ島からタウィタウィ島経由でサバ州へ入国したという人は、インタビューをした８人のうち女性３人、男性1人いました。かれらも自分が密入国するという意識はなく、当時サバ州に行くにはパスポートは要らなかったと語っています。入国後、女性３人は現地で知り合ったマレーシア人またはマレーシアに長期滞在が可能なビザを持つ米国人と結婚し、男性は1990年代に実施された適法化プログラムでフィリピンのパスポートを入手し、身分を合法化しました。

このような「裏口」入国が一般化していた背景として、いくつか重要な背景を指摘できます。受け入れ側のサバ州の事情をみると、経済的には大規模開発事業を進めるための低賃金労働に対する需要（と雇用者側がそれを手っ取り早く周辺諸国から調達しようとしたこと）や、州政府「独自」の身分証明書の発行、連邦政府の国境警備や外国人急増問題に対する対策の不徹底といった事柄が挙げられます［山本2014; Lumayag 2016］。他方、送り出し側のフィリピンでは、1970年代後半からの長引く経済不況、政治的不安定、治安の悪化（特にミンダナオ地方）、国民の間での海外出稼ぎブームの拡大といった出来事が大きく影響しました。

ネットワークの形成という意味では、先に述べたようにサバ州とその周辺海域は１つの海域圏であったことにくわえ、第１期やそれ以前からサバ州にフィリピン出身者がおりチェーンマイグレーションが続いていることも関係しています。

◉事例３――ペニー（49歳）

第３期の例としてはペニーさんの経験を取り上げます。

ルソン島北部南イロコス州出身で、貧しい家族を助けるためにハイスクールを卒業した年、16歳でマニ

ラへ出稼ぎに行きました。19歳からは、サウジアラビア、続いてイラクへ家事労働者として出稼ぎに行き、28歳になったとき帰国し、結婚しました。その後、地元で子育てをしていましたが、家計は苦しく、2010年、生活費を稼ぐために再び海外出稼ぎを考え始めたとき、マレーシアでの仕事をあっせんするリクルーターと出会いました。マレーシアならば、家事労働者ではなくホテル関係のサービス業に就け、中東よりも高い賃金がもらえると聞き、地元の友人と２人で渡航を決めました。マレーシアでは就労ビザは後からとれるからと説明され、ペニーさんとその友人は、パスポートは持ちながらも就労ビザは取得せずに※マレーシアに入国しました。ところがリクルーターに連れてこられたコタキナバル市のマッサージ店は性産業の店だったため、友人らと慌てて逃げ出しました。連れ戻されないように身を隠しながら、街で出会ったフィリピン人に自分たちの境遇を伝え、仕事や住居に関する情報をもらい、ビザ更新のための出入国（ブルネイ往復）を繰り返して次の仕事を探したそうです。いくつかの仕事を試した後にマレーシア人の個人宅での家事労働の働き口を見つけました。６カ月働いた後、フィリピンにいったん帰国し、家事労働者のOFWとして再びコタキナバル市に戻りました。その後も転職を２回して、現在は同市の民泊施設で清掃を担当しています。子どもが大学卒業するまでは、コタキナバル市で働き続けるだろうと語っていました。

ペニーさんは地元ではプロテスタント系宗派の信者ですが、その宗派の教会の仲間より、FCのカトリックの仲間の方が楽しいので、FCメンバーと週末を一緒に過ごしているとのことでした。ペニーさんに、中東（サウジアラビアのリヤドならびにクウェート市）での就労とマレーシア（現在のコタキナバル市）での就労を比べての感想を聞いたところ、後者の方がより良い環境だと言っていました。理由は、フィリピンとの地理的、文化的な距離の近さのほかに、FCのようなコミュニティ活動に参加できるからだそうです。

FCメンバーの話では、かつてサバ州の正規滞在者は家族ビザの保有者がほとんどでしたが、コタキナバル市における近年の傾向として、OFWとして滞在する人の割合が増えています。OFWの職種は家事労働者やホテル関連のサービス業が多いとの話でした。この指摘は、マレーシア全体において正規滞在と非正規滞在の外国人の割合の変化について述べたKassim and Gin［2011］の調査報告書の内容とも似ています。報告書は、調査対象者のうち1970年代にマレーシアに入国した全員が非正規の手続きを経ずに入国したけれども、その後次第に正規の手続きを経て入国する人が増え、2000年代に入国した人は、正規と非正規が半々になったと記しています。FCに参加するOFWの場合も、サバ州に馴染むと短期の就労ビザを更新して長期間働き続けるケースが多いようにみえます。

※ ASEAN加盟国間の短期滞在のためのビザ相互免除制度を利用したことを意味する。

まとめ

図１は、事例に挙げたケースやそれ以外のケースも含めて、フィリピン人キリスト教徒が長期に滞在する過程を単純化して書いたものです。

まだデータは少ないため、今日お話しした限られたデータを踏まえての予備的考察として申します。フィリピン人キリスト教徒たちの滞在の長期化プロセスで重要な要素として、サバ州（マレーシア）とフィリピンの間には経済や生活レベルでの格差があることにくわえ、アドホックな出入国管理政策がとられてきたことが大きな背景にあり、イギリス植民地期からフィリピン側から移住する人のネットワークが存在することなどが挙げられるでしょう。事例をみると、マレーシアの国籍を持つ人や長期滞在資格（ビザ）を持つ外国人との通婚を通して、サバ社会に包摂されるケースが目立ちます。サバ州が元来、多様性に富み、異なる民族の分断がそれほどみられないという文化的風土を示唆しているようです。

フィリピン人キリスト教徒の間では、サバ社会のなかであまり目立たないように生きる「不可視化戦略」とも呼べる、長期に滞在するための術（すべ）が共有されている点も特徴的と思いました。これは、非正規の滞在者が非常に多いことや両国間の国境問題が存在することが関係していると考えられます。さらに、非正規滞在者に対してこれまでに両政府による滞在の合法化の方策がなされたり、通婚を通して滞在を合法化してきた人が多かったりしたために、滞在していればいつか正規の移民となるチャンスがくるかもしれな

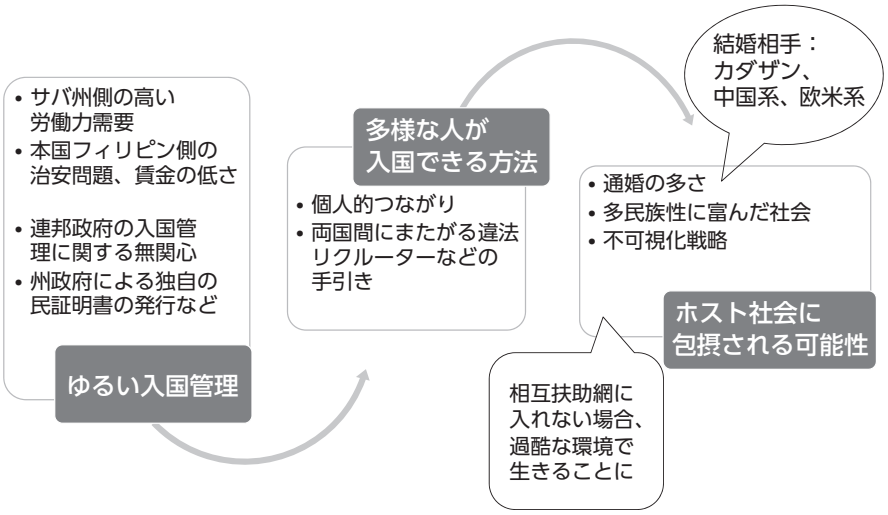

図１　滞在長期化のプロセス（概念図）

いという期待感が非正規滞在者の間にあるのかもしれません。

一方、歴史的推移をみてみると、近年、コタキナバル市では正規のOFWのプレゼンスが増してきました。この新しいトレンドは、フィリピン出身者にとってサバ州がかつては新たなチャンスをつかめるかもしれない移住先、「新天地」だったけれども、今では世界に多数ある海外出稼ぎ先、つまり一時的滞在の場の１つに変化しつつあると言い換えられます。とはいえ、賃金がフィリピンより高く、地理的文化的に近く、これまでにたくさんのフィリピンにルーツのある人が移住した歴史もあることから、今後もサバ州はフィリピン人キリスト教徒が長期滞在する可能性が高い地域であることに変わりはないと思います。

文献

Allerton, Catherine. 2017. “Contested Statelessness in Sabah, Malaysia: Irregularity and the Politics of Recognition”. *Journal of Immigrant and Refugee Studies*, 15(3): 250-268.

Battistella, Graziano and Maruja M.B. Asis (eds.). 2003. *Unauthorized Migration in Southeast Asia*. Quezon City: Scalabrini Migration Center.

Commission on Filipinos Overseas (CFO). 2017. “Stock Estimates of Overseas Filipinos (as of Dec. 2013)” (http://www.cfo.gov.ph/)

Kassim, Azizah. 2009. “Filipino Refugees in Sabah: State Responses, Public Stereotypes and the Dilemma Over Their Future”. *Southeast Asian Studies*, 47(1): 52-88.

Kassim, Azizah; Zin, Ragayah Haji Mat. 2011. *Policy on Irregular Migrants in Malaysia: An Analysis of its Implementation and Effectiveness* (PIDS Discussion Paper Series, No. 2011-34). Makati City: Philippine Institute for Development Studies (PIDS).

Lumayag, Linda A. 2016. “A Question of Access: Education Needs of Undocumented Children in Malaysia”. *Asian Studies Review*, 40(2): 192-210.

清水展 2009「『新天地』発展への貢献と居場所の模索」宮崎恒二（編）「境界のエスノスケープ：ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1-43。

山本博之 2014「『スールー王国軍』兵士侵入事件」『地域研究』14(1), 214-237。